

のといわれている。即ち(1)食生活の高度化、(2)食生活の多様化、(3)食生活の平準化、のそれである。戦後、我が国の食生活は昭和30年には量的充足の段階を一応脱し食料構成高度化を伴う構造的変化の段階に入った。更に昭和35年頃より加工食品の増加や調理の多様化、食生活の社交的趣味的要素の増大など多様化現象がみられるようになり、40年にはこれらの近代化現象は高度化の方向で平準化傾向を示すようになった。このような戦後の食生活の消費構造の著しい変化のなかで常に問題の根本としてあったのは米の消費が将来どうなるかということであった。

最近の動物性食品の消費の急速な伸びや米の消費量の低下がただちに西欧型の食形態への移行を示すものとは思われないが、主食のパターンの変化がどのような要因によって行なわれるかは興味深いことであるが、すでに報告されているものでは、パン食の普及は所得の高さと正比例する傾向にあるといわれている。

今回我々は主食パターンの変化がもたらす食構成の特徴について、農村地域の食生活調査結果より考察したので報告する。

調査結果では1日1回パン食をとっている家庭では米食家庭に比較して牛乳・野菜類・嗜好食品の消費量は高かったが、食品構成の上では問題のあることが判かった。

A-64 食料の消費傾向に関する一考察（第5報）  
—主食パターンの変化と食構成について—

安城学園大家政 ○稲垣 翠  
小林 玲子  
佐々 洋子

食生活の構造的変化の段階は次の三つの過程を進むも